

こんにちは！ 歴史資料室の鈴木です。

携帯電話が普及して以来、公衆電話を使う機会もめっきり少なくなりましたね。今回は、その公衆電話にまつわるお話です。

日本に公衆電話が誕生したのは、電話事業の開始と同じ明治23年（1890）です。この公衆電話は「電話所」と称し、まず東京の15か所の電信局内と、横浜の1か所の電話交換局内に開設されました。

その後、明治33年になると新橋駅・上野駅に、さらには東京の京橋附近にも「自働電話」が登場し、駅や街頭からも電話がかけられるようになりました。



桜水社同人 編『博覧会と東京 経済的見物』  
(1914年 桜水社、国立国会図書館デジタルコレクション)

では、青森市ではどうだったのでしょうか。

まず、明治38年10月15日、青森市浜町にあった青森郵便局内で電話交換業務が開始され、その2か月後の12月16日には局内に「電話所」が開設されました。電話所では、局員に相手の番号を告げて回線を接続してもらい、料金を窓口で支払って利用します。家に電話を所有しない人も、電話所に行ってかけることができました。

さらに、明治40年3月12日に、県内初の「自働電話」が青森駅構内にお目見えしました。自働電話は、電話交換手を通すものの電話機を自分で操作してかけることができ、また料金も硬貨を投入して支払います。



浜町にあった青森郵便局（明治 39 年「青森市全図」歴史資料室蔵）

その使い方は、まず電話機の横にあるハンドルを 1 回まわしてから受話器を耳に当て、交換手につながったことを確認します。そこで交換手に相手の電話番号を告げると、お金を入れるように指示されます。通話料は 1 通話 5 分間につき 5 銭、回線が混んでいる場合でも「至急通話」と告げて 10 銭出せば優先的に接続してもらえました。電話機には硬貨の入れ口が 2 つあり、右が 5 銭、左が 10 銭です。硬貨が落ちるときに 5 銭はチーン、10 銭はポーンと音が鳴る仕組みで、交換手はその音で料金の支払いを確認し回線を接続しました。

ただし、うっかり受話器を持ち上げる前や、交換手が指示する前に硬貨を入れてしまうとお金は戻って来ず、再度投入しなければなりませんでした。

青森駅の自働電話は、設置当日さっそく 11 件の利用があったそうです。その後、明治 42 年 2 月には浦町駅に、明治 45 年 3 月には旭町郵便局前にも自働電話が設置されました。



明治 41 年の青森駅  
（『目で見える青森の歴史』より）

やがて、大正時代末になると、それまで手動で行っていた局内の電話交換業務にダイヤル自動方式が導入されることになりました。そのため、アメリカで命名された「オートマチックテレホン」を直訳したといわれる「自働電話」という名称が自動方式と紛らわしいことから、大正 14 年（1925）に「公衆電話」と改称されたのだそうです。

※今回は『電話 100 年小史』（1990 年 日本電信電話株式会社）、『青森電話局七十三年の歩み』（1979 年 青森電話局）などを参考にしています。